

目次

はじめに	/ 5
良寛の出生	/ 7
幼年時代	/ 12
少年時代	/ 14
大森子陽に学ぶ	/ 14
青壮年時代	/ 20
出家	/ 20
岡山時代	/ 25
国仙和尚	/ 31
円通寺での生活	/ 33
印可の偈をうける	/ 35
父母の死	/ 37
大而宗龍との相見	/ 41
近藤万丈が土佐で良寛に会う？	/ 41
諸国行脚	/ 42
良寛の関西紀行	/ 44
帰国	/ 50
弟たちの死	/ 53
原田鶴斎、大村光枝との交流	/ 55

五合庵時代 / 57

亀田鵬齋との交流 / 62

鈴木文台との交流 / 62

阿部定珍との交流 / 64

橘屋の没落 / 65

妹の死 / 68

親しい人々の死 / 69

遍澄の訪問 / 71

乙子神社草庵時代 / 72

維馨尼との交流 / 74

東北地方への旅 / 75

万葉の研究 / 76

中国から橋杭の漂着 / 77

牧野忠精の来訪 / 78

解良叔問の死 / 78

木村家庵室時代 / 80

大蔵経記を書く / 82

三条大地震 / 83

木村周蔵への戒め / 84

貞心尼との出会い / 84

弟由之との兄弟愛 / 89

良寛の病気 / 89

良寛の人柄と生活ぶり / 93

略年表 / 100

あとがき / 102

はじめに

良寛は江戸時代の末、宝暦八年（一七五八）新潟県三島郡出雲崎町に生まれ、天保二年（一八三一）新潟県長岡市和島で亡くなった。途中二十二歳から三十四歳まで岡山県玉島（倉敷市）の円通寺で修行し、その後三十九歳ごろまで諸国を行脚して帰国した。人生の大半を新潟県で過ごした新潟人、越後人といってよいであろう。

良寛は、禅僧、詩人、歌人、書家として、新潟県のみならず、日本を代表する偉大な人物であり、さらに世界の良寛とまでいわれるようになってきた。

良寛の宗教は仏教の曹洞宗で、師の大忍国仙や宗祖道元の教えをよく守り、生涯、寺を構えず、妻子を持たず、物質的には無一物に徹し、清貧の思想を貫いた。それでいて、真言宗、浄土宗、浄土真宗、日蓮宗、神道にも通じ、孔子、孟子、老子、莊子などの思想をも深く学び、雑炊宗といわれる。そうしたなかでも、法華経に深く帰依し、「法華讃」は良寛の究極を示している。

良寛の漢詩は六百余首。唐木順三氏が「最も日本人らしい日本人。日本的な詩人」と激賞し

たように、日本を代表する詩人といわれる。

良寛の和歌は、短歌、旋頭歌^{せどうか}、長歌などあわせて千三百余首。齋藤茂吉、吉野秀雄、上田三四二氏らによって「万葉調の歌人、万葉調中の良寛調を完成した人」として、大変高く評価されている。

良寛の書は、自作の詩や歌を書いたものを中心に、楷書、行書、草書、かな、手紙など、日本の書聖といわれる空海（弘法大師）をもしのぎ、和様^{わよう}の最高峰、日本美の極致とまで絶賛されている。

良寛の俳句は百首ほどにすぎないが、「世の中は桜の花になりにけり」「たくほどは風がもてくる落葉かな」「盗人にとり残されし窓の月」など、世界的に知られる名句を詠んでいる。

そのほか、子どもたちとまりつきやかくれんぼをして遊び、多くの逸話を残し、一休のトンち話とともに、子どもから大人まで広く親しまれている。

禅、詩、歌、俳句、書、逸話などを総合した良寛の人間性が、多くの人々から敬慕されているのである。

以下、コンパクトな書物ながら、本書によって、良寛にいつそう親しんでいただければ幸いである。

良寛の出生

良寛は宝暦八年（一七五八）、現在の新潟県三島郡出雲崎町に生まれた。幼名は栄蔵、元服して文孝^{ふみたか}、字は曲^{あまなまがり}、禅僧となって良寛と呼ばれるようになった。

母の秀子は享保二十年（一七三五）新潟県佐渡市相川の山本庄兵衛の長女に生まれた。従来の説では十七歳の時、出雲崎の山本新左衛門の養女になったとされていたが、佐渡の磯部欣三、田中圭一両氏によつて、県立佐渡高校にあつた「佐渡国略記」に、おのぶが新津生まれの新次郎に嫁いだ記事を発見され、良寛の母の名はおのぶだという説を出された。

更に新津の新次郎は新津の旧家桂^{かつらたかあき}誉章で、おのぶは一度桂誉章に嫁ぎ、数年後に離別、二十一歳の時、山本以南（新木重内）と再婚したとされた。

更に飛躍して、良寛の父は与板^{よいた}から入婿^{にやうせい}した山本以南ではなく、



出雲崎の街並み

「良寛の母の生家 橘屋跡」碑（佐渡市相川）



新津の桂誉章だとされ一大センセーションをまき起こした。新津の皆さんは大喜びし、与板の皆さんは非常に困惑した。

その後何人かの研究家が賛否両論を発表。現在は、おのぶと秀子は同一人物で、幼名をおのぶといい、おそらく以南と結婚するころ秀子と改名したのではないか、といった線に落ちついている。おのぶを主張するあまり、秀子を全面否定するのは行き過ぎではなからうか。本書では、特に必要な場合を除き、良寛の母の名は秀子で統一したいと思う。また良寛のタネも、桂誉章ではなく、山本以南で通したいと思う。

父は長岡市与板の割元（大庄屋）新木与五右衛門の二男・山本新之助（泰雄）で、出雲崎の山本家に婿入りし、秀子と結婚した。俳号を以南と称し、北越蕉風中興の棟梁といわれる俳人であった。本書では分かりやすく山本以南と表記することにしよう。

佐渡市相川には「良寛の母の生家橘屋跡」の石碑と、良寛の「元歌」の詩碑、また郷土博物館前には「良寛の母之碑」が建てられており、同碑には「たちねのはがかたみとあさゆふに、佐渡